

児童生徒と学級の実態から 年間を通してはぐくむ国際理解教育の授業の在り方について

国際理解教育研究会議

研究員 首藤 弘明（川崎市立古市場小学校） 仲村 晃代（川崎市立長沢小学校）

福岡 弘行（川崎市立野川小学校） 坂田 智恵（川崎市立塚越中学校）

指導主事 佐藤 公孝

I 主題設定の理由

平成 21 年度国際理解教育研究会議では「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」（平成 17 年度文部科学省）をもとに、国際理解教育目標構造図（平成 13 年度国際理解教育研究会議作成）と新学習指導要領の関係を整理して、新しい国際理解教育目標構造図を作成した。そして、国際理解教育の実践を考える時、①国際理解教育と児童生徒の実態、②学習内容、③協同的な学習活動、④児童生徒の気づき・考え・行動の①～④の視点をもとに単元づくりを進めるプロセスを提案した。しかし、国際理解教育で育てる態度・能力の特性を考えた時、年間を通した継続的な取組（学級づくり、朝の会など）と教科等の実践を組み合わせることが必要ではないかという課題が生じた。

本研究会議では、年度当初に児童生徒と学級の実態を把握した上で、国際理解教育目標構造図にそって、年間を通して国際理解教育で育てたい児童生徒と学級の姿を設定する。そして、年間を通した継続的な取組と教科等の実践を両輪として、一人一人の児童生徒の態度・能力を育てるとともに児童生徒にとって、一番身近で重要な社会である学級を育てる実践の姿を探る。

II 研究の内容

1 研究の方法

- （1）学級担任の見識を大切にしながら、児童生徒と学級の実態を把握するために、新潟大学附属新潟小学校で開発された学級アンケートを活用する。
- （2）児童生徒と学級の実態を把握した上で、国際理解教育目標図にそって、年間を通した継続的な取組を検討する。
- （3）国際理解教育目標構造図で示された態度・能力を小学校低・中・高学年、中学校ごとに系統立てて実践できるように、国際理解教育学年表を作成して、検証授業を行う。教科等については、従来の目標に、他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献することなどが新たに追加された道徳で行う。

2 国際理解教育学年表一部抜粋

表 1 国際理解教育学年表 5・6 年

国際理解教育学年表	小学校5・6年生	目標構造図でめざす資質・態度 人のかかわりの中で、広い視野をもち主体的に行動する子
A 異文化や異文化をもつ人々を受容し共生する力	①②いろいろな立場や考えをもつ人々（川崎市に住む外国人市民）とのかかり合う中で、それぞれの考えや生きた方を大切にしようとする。 ①②我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解し、世界の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できる。 ③自分たちの生活には地球温暖化や食料の輸出など価値が対立する問題があり、世界中には多様な考え方や価値が存在することを認識することができる。 ④⑤自分とちがう意見や相手の立場を認めながら、話し合いを進め、自分の考えを深めたり、グループの考えをまとめたりすることができる。	①多様な文化や人々の生活、習慣、価値観について、認識・理解する。 ②それぞれの国や人の伝統と文化についても尊重する。 ③世界や国、地域が相互にむすびつき、環境・情報・平和・福祉・人権など共通の課題を共有していることを認識・理解する。 ④自分とちがう意見や相手の立場を認めながら、議論をまとめる。 ⑤問題を解決し、葛藤や対立を乗り越えてよりよい人間関係をつくりだそうとする。
B 自らの考えや意見を発信し、具体的に行動する力	①②目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫して話すことができる。 ③学校における身近な問題に関心をもち、改善に向けて具体的に行動する。	①進んでコミュニケーションを図ろうとする。 ②場や目的、意図に応じて、自分の考えをさまざまな方法でわかりやすく表現する。 ③学級や学校、地域における身近な問題に関心をもち、改善に向けて具体的に行動する。
C 自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立	①人とかかわりを通して、自分のよさや個性を知り、自分の生き方に自信をもつ。 ②社会の事象について、関係づけたり、背景にあることを予想したり多面的に考え、判断しようとする。 ③郷土や日本の伝統と文化を大切に、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	①自分のよさや個性を知り、自分の生き方に自信をもつ。 ②社会の事象について、自分の基準をもって判断できる。 ③自国の伝統と文化を理解し、それらをはぐくんできた郷土と日本に誇りをもつ。
年間を通した継続的な取組例	自分たちの生活とつながる世界ニュース 読書の影響（日本の湯水、世界では・・・）	
単元づくりの視点やキーワード	人と社会のかかわりを通して 学校・川崎・日本 多面的に考える	

Ⅲ 研究の実際（検証授業）

1 A小学校 第1学年

(1) 児童生徒と学級の実態

①学級目標

- ・なんでもがんばるげんきな子
- ・ともだちいっぱいやさしい子

②児童生徒や学級の実態

全体的には元気で明るく活発な子どもたちである。学校生活にも慣れ、一つ一つの新しい出来事に一生懸命取り組もうとする意欲が見られている。子どもたちの

生活や友達とのかかわりは、小学校に入学してから大きく広がってきている。入学当初は、自分の思いが強すぎてやりたいことを優先してしまったり、ちょっとした言葉遣いや伝え方でトラブルになったりすることもあったが、少しずつかかわりを深める中でお互いを理解しながら、温かい声かけができるようになってきている。本学級には、フィリピンやインド、中国という外国籍の保護者をもつ児童が4名在籍しており、諸連絡を個別で行ったり、給食で特別に除去食を作ったりするなどの配慮を行っている。そうした配慮についてクラスの子どもたちはある程度認識しているが、子ども同士では他の国や文化の違いを特に意識することなくかかわりをもっている。しかし、友達の一部帰国やニュースなどから、外国の様子が度々話題になることもあり、関心の広がりも見えている。

学習面では、経験の差が大きく、個別の配慮を必要としている児童も数名いる。入学して間もない時期に、日本の昔話について取り上げる『おはなしよんで』という国語の学習を行ったが、有名と思われる話についても「聞いたことがない」「知らない」という児童が多くおり、反応が大きく分かれていた。生活の中で学んでいると思われる事柄でも、経験の違いを大きく感じるような場面があった。授業の中では、なかなか学習に集中できなかつたり、他の子の目を気にしたりして気持ちを表現できない場面もしばしば見られるが、教師の話や問いかけに対しては、進んで応えようとする前向きな姿勢をもっている子が多い。

(2) 国際理解教育目標構造図をもとに、国際理解教育で育てたい児童生徒と学級の姿

何事にも積極的に取り組む前向きな姿勢を大切にしながら、自分の考えを進んで表し、意欲的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢を育てていきたい。その中で、達成感や自己肯定感を高めるとともに他者へのまなざしを強めていきたい。そして、友達や考えや思いに共感したり、違いを認め合ったりする協力的な姿勢と主体的に行動する力を培っていききたいと考えている。

また、地域についての学習や多くの人とのかかわりについて学ぶ中で、地域への愛着や周りの人への感謝の気持ちを育み、日本文化や伝統にも関心をもたせていきたい。

(3) 実践の計画

①年間を通した継続的な取組

- ・学級目標を大切にしながら、明るく楽しい雰囲気を作る。
- ・普段の学習の中で、自分の考えを発表したり友達や考えを受け止めたりする活動を積極的に取り入れていく。
- ・読書タイムで日本の昔話のシリーズを取り上げ、読み聞かせを行う。また、他国とのかかわりを感じる機会として、隣国である中国や韓国・朝鮮などの昔話も読み聞かせに取り入れ、その共通点や相違点についても自然な形で触れていく。
- ・音読の課題の中で詩文やことわざなどの暗唱を取り入れる。日本語のリズムに親しみ、語彙を豊かにしたり、声を出して進んで発表したりする力を培っていく。
- ・生活科で行う伝統遊びや地域学習、季節についての学びの中で、日本の文化や風習について取り上げる。
- ・外国籍をもつ友達への関心から他国への興味が広がった際に、世界地図で場所を確認したり、他国

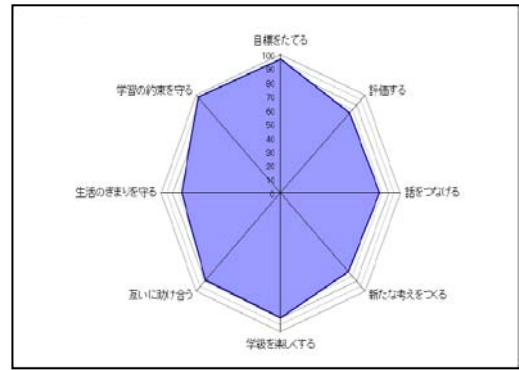


図1 A学級のプロフィール

の文化を簡単に紹介したりする活動を取り入れる。

②教科等の計画

国際理解教育の目標	C-③ 自国の伝統と文化を理解し、それらを育んできた地域と日本に誇りをもつ。	
主題名	ぼくの町 4-(5) 郷土愛	
ねらい	郷土の文化や生活に親しみ、愛着を持つ。	
資料名	「にちようびのさんぼみち」 (道徳 みんななかよく 1 東京書籍)	
授業の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 自分の住んでいる町に親しみ、愛着をもつ気持ちを育てるために、地域に目を向けた内容の資料を扱う。 友達の話を聞き、共感したり、新たに知ったりして関心を高めていけるようにする。 	
授業	導入	1 資料の絵地図を掲示し、話に関心をもつ。 ○どのような町だと思いますか。 ・絵地図に描かれたものを見て、想像を膨らませる。
	展開	2 「にちようびのさんぼみち」を読んで話し合う。 ○いつもと同じ公園までの散歩道で、どんなことを思っていましたか。 ・おじいさんと散歩に出かけたけんたの様子を確認し、気持ちを考えるようにする。 ○いつもと違う散歩道に入って、どんなことを考えたでしょうか。 ・はじめて通る道に入り、興味をもって散歩するけんたの気持ちを考える。 ・不安な気持ちもあるが、おじいさんと一緒なので安心出来ることを確認する。 ○新しい発見をして、どのような気持ちになったでしょうか。 ・新たな発見により自分の町に対する興味や親しみがわいたことについて考えるようにする。
	振り返り	3 自分の町について考える。 ◎けんたくんに自分の町の好きなどころ、いいなと思うところを教えてください。 ・書きやすくするために「けんたくんへ」と書いたワークシートを配付する。 ・公園たんけんなどの経験について参考にして良いことを伝える。 ・記入した内容を友達同士で発表しあい、町への関心を高めていくようにする。
	終末	4 まとめをする。 ・地域の様々なかかわりを大切にし、より深く知り、かかわっていこうとする気持ちを高められるようにする。

(4) 振り返り

1年生の子どもたちは、生活科の公園たんけんなどで、家庭や学校を取り巻く地域に目を向ける機会を多くもってきているため、その経験が生きていることを感じた。また、今回は「うちのまわり」という生活に密接した場所に目を向けたため、その子らしい感じ方や思いが表れていた。「うちのちかくにでっかい山があるんだよ。その上のにぼるとすごくおもしろいよ。」「うちのちかくのこうえんに、ブランコとのにぼりぼうが、がったいしているのがあるんだよ。」「うちのちかくに、あったかいおふろやさんがあるんだよ。いろいろなおふろがいっぱいあるよ。」「こうえんに、あたまにかぶれる大きなはっぱがあるんだよ。」など、多くの好きなどころを書き出し、その思いは伝え合う活動に結びついていた。

話し合いの中で、「ひみつきち」が話題になると、多くの子が、喜んで自分たちの秘密の場所について話し出していた。その話を聞き、授業の後に「こんど、いこう」と話をしている姿もあった。

国際理解教育では、豊かな国際性を培う資質の一つに「自国の伝統と文化を理解し、それらをはぐくんできた地域と日本に誇りをもつ」という内容をあげている。こうした郷土に関する題材を丁寧に扱い、子どもの目線で地域に目を向け、その子が感じた「よさ」や「思い」を伝える機会を作っていく大切さを感じることができた。

2 B小学校 第6学年

(1) 児童生徒と学級の実態

①学級目標

- ・明るく 仲良く 笑顔なクラス
- ・みんなで助け合い ひとつになれるクラス
- ・心から信頼し合えるクラス

②児童生徒や学級の実態

全体的に、周りに流されてルールを守れない子が多かったが、小集団でかかわりをもつことで、少しずつルールを守れるようになってきた。また、言葉遣いや相手の気持ちを考えられず、トラブルになることがあった。しかし、休み時間や給食時間など声をかけ合って遊んだり、楽しくおしゃべりをしたりと一人一人がかかわりをもって生活しようという意識が芽生えつつある。

クラス 25 人中、23 人が学齢前から同じ地域で生活をしている。海外の国の様子や出来事については、スポーツやテレビなどで知っている程度である。

学習面では、ほとんどの子が落ち着いて授業に参加でき、一人一人の学習意欲、理解力、表現力がついてきた。しかし、個人差が大きく、個に対応する指導の工夫が必要である。また、自分の考えを進んで発表する子や問題解決学習ができる子が増えてきたが、さらにグループでの話し合いや発表などの機会を多く設定し、コミュニケーション力を育てていきたい。

(2) 国際理解教育目標構造図をもとに、国際理解教育で育てたい児童生徒と学級の姿

いろいろな立場や考えをもつ人々との直接的または間接的なかかわりをもつことでそれぞれの考え方や生き方を大切にする気持ちを育てていきたい。その中で、自分とちがう意見や相手の立場を認めながら話し合いを進め、改善に向けて具体的に行動する気持ちを育てていきたい。また、社会事象について、関連づけたり背景にあることを予想したり多面的に考え、地域社会や日本と外国のつながりがわかり、大切にしようとする気持ちも育てていきたい。

(3) 実践の計画

①年間を通した継続的な取組

- ・読書タイム（各週木曜日 8:30～8:45）では、月1回「世界一素敵なおぼくの村」「地雷ではなく花をください」「地雷」「あなたが世界を変える日」「声に出して読みたい日本語」など、読み聞かせボランティアの方に取り上げてもらい、世界中には多様な考え方や価値観が存在することを認識させていく。
- ・ビデオ鑑賞「地雷を踏んだ象」、ユニセフ「世界のこどもたち」（写真展）鑑賞、山梨日立建機社長 雨宮 清氏による講演会「地雷除去への挑戦～子供たちがはだしで遊べるだいちへの復興～」を通して、世界や国、地域が相互に結びつき、世界の人々と共に生きていくことが大切であることを考えさせていく。
- ・社会の事象について、関係づけたり、背景にあることを予想したり多面的に考え、判断できるように「週間こどもニュース」を視聴する。

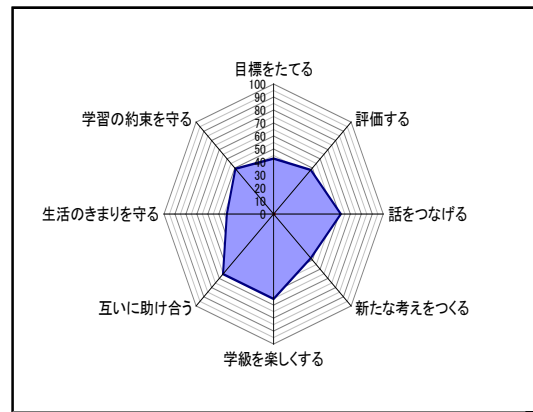


図2 B学級のプロフィール

②教科等の計画

国際理解教育の目標	C-② 社会の事象について、自分の基準をもって判断できる。	
主題名	世界の中の日本 4-(8) 国際理解・親善	
ねらい	世界の中での日本と日本人の置かれている立場を知って理解を深め、世界の人々や文化と積極的にかかわり、よりよい関係性を築こうとする気持ちを育てる。	
資料名	「世界がもし100人の村だったら」 (学研 道徳副読本)	
授業の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・NPO法人「オアシス」の「動画で見る100人の村」を見せ、視覚的にアプローチする。百分率についてもグラフを使い、わかりやすく伝える。 ・自分の考えを書く学習活動を十分に取り、それをもとにペアで話し合う。 	
授業	導入	1 資料「世界がもし100人の村だったら」から、話し合う視点を共有する。 ○NPO法人「オアシス」の「動画で見る100人の村」を見る。
	展開	2 NPO法人「オアシス」の「動画で見る100人の村」を見て、感想交流をする。 ○「100人の村」を見て、感想を発表しよう。 <ul style="list-style-type: none"> ・率直な感想を出し合って、そこから話し合う柱を組み立てていく。 ・世界にはいろいろな人がいる ・豊かな人より貧しい人のほうが多いのか？ ・日本人のわたしは恵まれていると思う 3 「100人の村」メールに返事を書く。 ◎もしもあなたのパソコンに「100人の村」メールが届いたら、どんな返事をメールで送りますか？ <ul style="list-style-type: none"> ・私は今、このメールを読むことができ、それが幸せなのだなど気づきました。 ・100人のうち、今にも死にそうな人が一人いるので、それが0になるといいな。 ・先日聞いた地雷除去の話で20分に1人が犠牲になっているそうです。100人の村にたとえるとどのくらいなのだろう？
	振り返り	4 「100人の村」メールへの返事を読み合い、共通点や違いを見つける。 ○隣の人と書いた返事を見せ合い、「100人の村」について話し合ってみましょう。 <ul style="list-style-type: none"> ・平和な世界を望んでいることは同じだけど、どうすればいいかな？ ・私たち日本人と世界の子どもたちはだいぶ違うことがわかった。もっと知りたい、かかわりたいな。 ・〇〇さんと話していて、自分と違う人を理解するって大変だなーと思いました。

(4) 振り返り

年間を通して平和について考えてきた子どもたちが、この教材と出会うことで今までやってきたことを振り返る機会をもつことができた。メールへの返事を見ると「当たり前と思っていたことが、当たり前ではなかった。」「地雷除去に対する思いや戦争などの悲惨なことを考えていたけど、このメールを見て、また、すごく考えさせられた。」など、自分の立ち位置に気づいたり、考えをさらに深めたりしていることがわかった。

副読本の一部を無声音のビデオアプローチすることで子どもたちの心に強く響いたと考える。じっくり考えて返事を書くことで今まで気づかなかったことにも気づくことができた。また、ペアで話し合うことで、相手の考えを受け入れ、自分の考えの位置に気づくことができた。

今回の実践では、「相手意識をもつ」「例示の仕方」「少人数での話し合い」など実践の改善点について整理・変更を行い、他校でもう一度実践できた。実践の積み上げはこれからも大切だと感じた。

IV 研究の成果と今後の課題

1 児童生徒と学級の実態から年間を通してはぐくむ国際理解教育の授業の在り方についての提案

国際理解教育は、国際化した社会で、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要な態度・能力の基礎を育成する教育である。その必要な態度・能力をはぐくむために、川崎市では長年国際理解教育目標構造図をもとに、実践が積み重ねられてきた。国際理解教育は、教育課程全体で育てるものであり、1つの単元を通して急性に育つものではないことは明らかである。しかし、授業実践をするたびに、各学年でどのような態度・能力をねらいにするか。教科等との関連性をどうするか。国際理解教育としての評価をどうするかという課題があった。

そこで、本研究会議は、それぞれの学年の教科等で実践する際に指針になるように国際理解教育学年表を作成した。従来の国際理解教育目標構造図と学年表をもとに、①児童生徒と学級の姿の設定、②年間を通じた継続的な取組、③教科等の実践、④振り返りの①～④の手順を2ページの形式で提案をすることができた。この形式を活用することで、一度提案した実践を他校でも実践をすることができると考える。

また、平成23年2月には小学校国際教育研究会で報告をすることができ、研究会を通してそれぞれの教師が学級や児童生徒の実態に合わせて国際理解教育の実践をする土台を提案することができたと考える。

2 国際理解教育学年表の今後の課題

今年度、作成した国際理解教育学年表は、「初等中等教育における国際教育推進検討会報告」（平成17年度 文部科学省）と「学校における持続可能な発展のための教育（E D S）に関する研究中間報告書」（平成21年度 国立教育政策研究所）を土台に、新しい学習指導要領における道徳を中心に作成したものである。今後は、国際理解教育学年表を実践する教科等によって内容を加除修正しながら進めていく必要がある。そのためには、小学校国際教育研究会と中学校国際教育部会に協力をいただきながら実践を通して改訂を進めていく必要がある。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なお助言をいただいた先生方、研究をご支援していただいた研究員所属の校長先生ならびに教職員の皆様に心からお礼申し上げます。

【参考文献】

佐藤郡衛・佐藤裕之編『共に生きる子どもを育てる国際理解教育』	教育出版	2006年
多田孝志『対話力を育てる』	教育出版	2006年
永田佳之・吉田敦彦『持続可能な教育と文化』	せせらぎ出版	2008年
『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』	文部科学省	2010年
『小学校 キャリア教育の手引き』	文部科学省	2010年
『学校における持続可能な発展のための教育（E S D）に関する研究中間報告書』	国立教育政策研究所	2010年

【指導助言者】

東京学芸大学 副学長

(川崎市総合教育センター専門員)

佐藤 郡衛